
遠ざかった春

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠ざかった春

【Nコード】

N2560P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

プラハの春に立ち上がったチェコスロバキアの市民達。この時は失敗してしまう。だが二十一年後には。プラハの春と東欧の民主化革命を題材にした作品です。

第一章

遠ざかった春

一九六八年、チエコスロバキアの首都プラハ。
今この街はだ。燃えていた。

「自由だ！」

「この国に自由を！」

「かつての自由を！」

誰もが叫びだ。そして立ち上がった。

これまでのソ連の支配から抜け出すことを宣言してだ。高らかに
叫んでいた。

その彼等はだ。はっきりと未来を見ていた。

「自由な国を作って」

「そして幸せを手に入れるんだ」

「絶対に」

チエコ人もスロバキア人も立ち上がっていた。誰もが武器を持ち
そしてビールを飲んで意気をあげていた。彼等は本気でソ連と戦い
自由を勝ち取るつもりだった。

その中にだ。彼等もいた。

赤い髪の青年と金髪の青年の二人だ。彼等は酒場でビールを飲み
ながら互いに話す。

木造の古風なその酒場でソーセージを食べ呑むのは黒ビールだ。
両方の味を心ゆくまで味わいながらだ。まず赤髪の青年が言った。

「できるか？」

「革命か？」

「ああ、それだよ」

「こつ金髪の青年に言つのである。」

「それ、できるかな」

「できるぞ。いや」

「いや？」
「やるんだよ」
金髪の青年は不敵に笑って言うてみせた。そしてであった。
「なあ、ヤナーチエク」
「ああ」
「御前今のチエコスコバキアは嫌いだろ」
「だからこうしてここに居るんだろ？」
赤髪の青年ヤナーチエクは少しむっとした顔で彼に言葉を返した。
「だからだよ」
「今の社会主義もな」
「ソ連の押し付けだよ」
ヤナーチエクはむっとした顔でまた言った。
「あの連中のな」
「そうだよな。しかしな」
「ああ、ドボルスキー」
ヤナーチエクは金髪の青年の名前をここで呼んだ。
「何だ、それで」
「俺達は俺達でやれるんだ」
これがドボルスキーの言葉だった。
「俺達でな。俺達の社会主義を作れるんだ」
「人間の顔をした社会主義だな」
「ああ、それだ」
これが今のチエコスコバキアの合言葉であった。
「それができるんだよ」
「そうだな、俺達ができるな」
「少なくとも今よりはずっとましになるさ」
「ドボルスキーはこうも言った。」
「ソ連の子分の今よりはな」
「同盟国ってことになってるぜ」
ヤナーチエクはジョッキを片手にシニカルに笑ってみせて言った。

「ワルシャワ条約機構の中なの」

「名前だけはな」

「名前だけか」

「ああ、それだけはな」

本当にそれだけだと。ドボルスキーは自分の金髪をジョッキを持っていない左手で後ろに払ってから言った。額が少し広がった。

「けれど実際にはな」

「そうだろ？子分だろ」

「属国だよ」

それだと言っただった。

「それ以外の何でもないさ」

「全くだよ。けれどこれからは違うよな」

「ああ、違う」

ドボルスキーの言葉が強いものになった。

第二章

「俺達は俺達でやっていく」

「本当の意味で独立してな」

「ソ連が何だ、ワルシャワ条約機構が何だ」

「ああ、そんなのは糞くらえだ」

二人で言い合う。黒ビールをおかわりしてそのうえでぐい、と美味そうに飲んでだ。そうしてそれからまた話をするのだった。

「やるぜ、真のチェコスロバキアの為にな」

「そうだな」

こう話してだった。彼等は意気をあげていた。そしてだ。

情勢はだ。話し合いと武力介入の話が交差していた。

ソ連はそのチェコスロバキアに警戒の念を強く抱いた。そのうえで恫喝もした。

だがチェコスロバキア側は折れずに己の意志を貫こうとする。両者の関係は次第に緊迫したものになっていった。

その中でだ。チェコスロバキアの市民達は緊張の度合いを高めていた。

次第にだ。彼等は覚悟を決めるようになっていた。

「ソ連が来たらな」

「ああ、その時はだな」

「やるか」

「戦うか」

「俺達でな」

その中にはヤナーチェクとドボルスキーもいた。彼等はプラハ郊外の工場で働きながらだ。その時が来るのを心の中で覚悟していた。

「死ぬなよ」

「ああ」

そして二人で言い合うのだった。

「俺達だつてな」

「戦えるんだ」

「そして勝ち取るうな」

「俺達の本当の国を」

「そうしような」

「ソ連が来てもだな」

ドボルスキーの言葉だ。工場の煙と機械油で汚れた顔ではあるがそれでもだ。目は生き生きとしていたし表情も確かであった。

その顔でだ。ヤナーチェクに返すのだった。

「やるぞ」

「ああ、わかった」

二人も覚悟を決めてその時を待ち受けていた。しかしだった。

そのソ連軍の数は圧倒的だった。しかもだ。

ほぼ全てのワルシャワ条約機構加盟国の軍が来た。これではだ。

どうしようもなかった。その結果。

チェコスロバキアは全土を占拠された。当然プラハもだ。プラハの春はこれで終わった。

西側諸国は一斉に抗議した。しかしそれは空しい叫びに過ぎなかった。

結局チェコスロバキアは元に戻った。ソ連の衛星国のままだった。

このことに市民達は落胆した。しかしであった。

彼等の中にはだ。まだ諦めていない者もいた。

それはヤナーチェクとドボルスキーも同じだ。二人は言うのだった。

「次だな」

「ああ、次だ」

「次こそはな」

ドボルスキーのアパートの一室で小声で誓い合っていた。

窓の外からは戦車が道を進むのが見える。当然ソ連軍の戦車だ。

しかし彼はそれを見ずにだ。今はお互いに誓い合っていた。

「俺達の本当の国を作るんだ」

「チエコスロバキアをな」

「ひよつとしたらな」

「ここでだ。ヤナーチエクがふと言った。

「スロバキアとお互い別れるかもな」

「ああ、それか」

「それはあるだろ」

ヤナーチエクはまた言った。

「自由になったらな」

「そうだな。元々違う民族だしな」

「それでもいいか？」

「いいだろ」

ドボルスキーは言い切った。

「俺達は本当の意味での独立を目指してるんだからな」

「それで別れてもか」

「別れても一緒だしな」

ドボルスキーはこうも言った、

「それでもな」

「まあお互い古い付き合いだしな」

ヤナーチエクの言葉は今はかなり客観的なものだった。

第三章

「俺達とあつちの人達はな」

「俺もスロバキア人は嫌いじゃないさ」

「俺もだ」

彼等はチェコ人である。この国のその一方である。その彼等がだ。スロバキアのこと話すのだった。

「兄弟みたいなものだからな」

「そうだな」

「それでだ」

ドボルスキーは話を戻してきた。

「やろうな、時が来ればな」

「ああ、絶対にな」

「本当の意味で独立して俺達自身で国を動かしていくんだ」
つまりソ連の衛星国から脱するというのだ。

「絶対にな」

「そうだな。ただ、ソ連はどうする？」

ヤナーチェクは真剣な顔になってドボルスキーに問うた。

「あの連中は」

「表立ってはやらないさ」

「表立ってはか」

「それでもやっついていこうぜ」

「それでもか」

「ああ、隠れるんだ」

そうするというドボルスキーだった。

「それでな」

「地下に潜伏するか」

「それでやっついていこうな。同志達を集めてな」

「そして何時の日か絶対にな」

「俺達自身の国を」

彼等は誓い合った。そうしてだった。

長い間密かに活動した。その間に二人共結婚して家族もできた。長い年月彼等は待つていた。そして遂にその時は来たのだった。

一九八九年のことだった。東欧が激震に包まれた。所謂民主化だ。その渦の中にチエコスロバキアもあった。そしてだ。

プラハ市民達は立ち上がりだ。民主化を目指した。

「今度こそだ！」

「ああ、春だ！」

「春を俺達の手に！」

「今度こそな！」

こう言い合いそして蜂起した。その中にだ。

彼等もいた。そしてだった。

後ろに多くの者達がいた。それは。

「行こうか！」

「大統領官邸に！」

「今から！」

「よし、行くぞ！」

「いいな！」

ヤナーチェクとドボルスキーが彼等の先頭に立つ。そしてだった。

「俺達の国をな」

「今度こそ手に入れる」

「いいな、だからだ」

「ここは戦うんだ」

こう話す彼等の顔には皺がある。それぞれの髪も減ってきている。特にヤナーチェクの額はだ。かつてよりもさらに広くなっていた。

だが彼等はだ。あの時うに戻っていた。そしてである。

「来たな」

「ああ、やっとだな」

二人で言い合うのだった。

「俺達の春がな」

「この国の春がな」

それが来たというのである。

「もうソ連が何をしてもな」

「やってやるがぜ」

こう言い合ってそのうえで向かいだった。彼等は遂に成功させた。

第四章

チエコスロバキアは民主化を果たした。その長い冬を終わらせてだ。

そして二人はだ。笑顔でビールを飲んでいた。

そのうえでだ。これまでのことを話すのだった。

「色々あったな」

「当局に見つかりそうになったしな」

「子供もできたしな」

「それもな」72

こう話してだった。そうしてだ。

「やっとできたな」

「俺達の国がな」

「人間の顔をした社会主義か」

かつてのプラハの春のスローガンだった。

「しかしな」

「ああ、今は民主化だな」

「それは変わったけれどな」

「それでもな」

果たしたというのである。彼等はだ。

「やれたな」

「諦めなかったらな」

「できたな」

「本当にな」

「よし、わかった」

それを話してだ。彼等はさらに話すのであった。

「お互いおっさんになったな」

「ははは、そうだな」

「皺もできたし」

「髪の毛も減った」

「太ったしな」

「お互いにな」

若い時と比べてだ。そうになっていた。やはり歳だった。しかしだ。それでもだった。

「なあ」

「ああ」

二人は笑顔で頷き合い。そしてであった。

「俺達はこれからな」

「この国の中で生きるか」

「折角やったんだ」

ドボルスキーの言葉だ。

「だからこの国の中で楽しまないとな」

「そうだな。スロバキアはどうやら独立するっばいかな」

「寂しいけれど仕方ないな」

「それはか」

「昔言ったよな。それは受け入れてな」

「そのうえでやってるか」

「何かを手に入れば何かを失うものさ」

ドボルスキーのここでの言葉はこうしたものだった。

第五章

「だからな。それはな」

「受け入れてか」

「それしかないだろ。けれど付き合いは続けるからな」

「そうなるんだな」

「そうさ。とにかくな」

ドボルスキーはまた言ってきた。

「いいな」

「ああ、俺達か」6

「確かに俺達の国は手に入れたさ」

「それはだというのである。」

「けれどな。それでもな」

「まだ何かあるのか？」

ヤナーチェクはいぶかしむ顔になってドボルスキーに返した。

「独立しても」

「その独立を守らないと駄目だろ」

「それをか」

「独立してはい、終わりじゃないだろ」

「ああ、そうだったな」

言われてだ。ヤナーチェクも気付いたのだった。

「そういえばな」

「そうだよ。本当にこれからなんだよ」

「独立してもそれを守っていかないとか」

「じゃあ聞くがな」

「ああ」

「またソ連の下につきたいか？」

ヤナーチェクに対して尋ねたのはこのことだった。かなり具体的な話だった。

「もう一回あの国に。どうだ?」

「それは嫌だな」

ヤナーチェクの返答はすぐだった。

「やっぱりな」

「そうだろ? やっぱりそうだろ」

「ああ、よくわかった」

こうドボルスキーに対して返した。

「守らないといけないか」

「で、言うけれどな」

ドボルスキーは笑顔になった。そのうえで次の言葉を出した。それは。

「これからだからな」

「これからか」

「ああ、俺達はこれからはじまるんだ」

そうだとしたのだ。

「何もかもな」

「わかった。じゃあ今度は」

「独立を守っていくぞ」

また言うドボルスキーだった。

「そえでいいな」

「それしかないしな」

「そういうこそさ。じゃああらためて飲むか」

言いながらジョッキを手取る。そこにあるのはビールだった。

黒ビールをその中にたたえているその黒ビールを飲もうとするのだ。

そしてだ。二人で言う。

「これは独立の祝い、そして」

「それを守る為のこれからの為の景気付けだな」

「そういうことだな。それじゃあ」

「ああ、今から」

二人で笑い合い。そしてだった。

「乾杯！」

二人でジョッキを打ち付け合ってそのうえで飲むのだった。彼等の長い戦いは終わった。そしてあらたな戦いがはじまるのだった。

遠ざかった春 完

2010・9・27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2560p/>

遠ざかった春

2010年12月1日21時25分発行